

## 1日目 1年ぶりの再会と甘酸っぱい汗の匂い嗅ぎ

悠太は今年も放浪の旅を続けていた。バックパックを背負い、適当なフェリーに乗り継ぎ、去年と同じ電波も届かない小さな離島に降り立った。去年の夏、ここで出会った高橋美咲お姉ちゃんに会うためだ。あの甘い匂いが忘れられなくて、1年ぶりの再会を心待ちにしていた。

浜辺を歩いていると、遠くから声が聞こえた。

「ゆうたー！ 来てくれたの！？」

駆け寄ってきたのは美咲、24歳。島育ちのズボラ巨乳お姉ちゃん。汗で濡れたタンクトップがFカップの胸を強調し、短パンの下のおももが汗でテカテカ。ポニーテールが首筋に張りつき、甘酸っぱい女の汗臭がふわっと漂う。畑仕事帰りで、1年ぶりの美咲はますますエロく熟れていた。

「お姉ちゃん.....久しぶり！」

悠太は興奮で声を震わせ、美咲を抱きしめる。美咲も汗だくの体でぎゅっと抱き返し、首筋に顔を埋めてきた。

「ゆうた、1年ぶりだね～。もう会えないかと思って寂しかったよ。汗び

っしょりでごめんね、畑で3時間ぶっ通しだったの」

その瞬間、悠太の鼻に甘酸っぱい汗の匂いが直撃。去年の記憶が蘇り、チンポが即座に硬くなった。

家に招き入れられ、縁側で麦茶を飲む。美咲は汗だくのまま悠太の隣に座り、腕を上げて脇をばたばたさせる。

「暑くて汗びっしょり〜。臭いかな？ 1年ぶりなのに、こんな臭いお姉ちゃんでごめんね」

臭いの特徴：甘酸っぱいトロピカルフルーツのような汗

- ・新鮮な汗に女の体臭が混ざり、マンゴーやパイナップルが少し熟れたような甘じょっぱさ。

- ・脇は砂糖を溶かしたような甘い刺激、息を吸うと鼻腔がくすぐられる。

悠太は我慢できず、美咲の脇に鼻を近づけ、深く嗅ぐ。甘い果実の匂いが肺まで染み込み、チンポがビクビク反応する。

「え、ゆうた？ 嗅いでるの？ ふふ、1年ぶりなのに変態さん♡ 去年

もこんなだったよね」

美咲はくすくす笑い、わざと脇を顔に押しつける。悠太は舌を出して汗を舐め、甘塩っぱい味を味わう。ねっとりした汗が舌に絡み、頭がぼーっとする。

「お姉ちゃんの汗、甘くて美味しい.....もっと嗅がせて」

美咲は目を細めて、悠太のチンポを短パン越しに触る。「ふふ、硬くなってる♡ じゃあ、もっと嗅いでいいよ」

夜、美咲の部屋で1年ぶりの再会を祝う。蚊帳の中で美咲はタンクトップを脱ぎ、巨乳を露出。悠太は脇に顔を埋め、甘い汗を嗅ぎながらチンポを扱う。

「お姉ちゃんの脇臭、甘酸っぱくてたまらない.....はあはあ」

美咲は悠太の頭を押さえつけ、脇を鼻に擦りつける。「ほら、もっと深く。1年分の臭い、全部吸い込んで♡」

悠太は興奮で射精。白濁液が美咲の脇に飛び散り、甘い汗と混ざる。美咲は指で掬って舐め、「ゆうたのザーメン、美味しいよ♡」

本音を吐露。「お姉ちゃんの匂いが好き。風呂、入らないでいて」美咲は目を輝かせて了承。「ゆうたが喜ぶなら、ズボラお姉ちゃん、ずっとこのままでいいよ♡」